「ながさきピース文化祭」が残したもの

去る９月１４日に開幕した「ながさきピース文化祭２０２５」(正式名称：第４０回国民文化祭・第２５回全国障害者芸術・文化祭)が１１月３０日に閉幕しました。「観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策と有機的に連携しつつ、地域の文化資源等の特色を生かした文化の祭典」である国民文化祭と、「障害者の芸術文化活動への参加を通じて、障害者の生活を豊かにするとともに、国民の障害への理解と認識を深め、障害者の自立と社会参加の促進に寄与する」ことを目的とした障害者芸術・文化祭が一体的な開催になったのは、平成２９年度の第１７回大会からだということです。全国持ち回り開催で長崎県が舞台となった令和７年度の今回、７８日間で多くの催し物が県内各地で実施されました。

ながさきピース文化祭２０２５が閉幕する間近の１１月２８日に「令和７年度第６５回長崎県音楽教育研究大会五島・南松大会」に参加するために五島を訪れていたのですが、目的のもう一つは、翌日に実施される「五島市障害者・芸術文化祭～みんなちがって　みんないい～」を参観することでした。この大会には鶴南特別支援学校五島分校の高等部生徒も「朗読・合奏・ダンス『いのちのうた』」というテーマで参加をしました。時間の都合上、残念ながら高等部の発表は見れなかったのですが、島内の保育園・幼稚園の園児や小中学校の児童生徒、作業所の方々など多くの方々の歌やダンス、演舞や書道パフォーマンスなどを鑑賞することができました。障害の有無に関わらず、誰もが文化芸術を楽しみ、自分を表現し、楽しそうに参加している姿は素晴らしい光景でした。

学校では、学習をとおして平和について考えたり、芸術や文化に触れる機会を意図的に盛り込んではいますが、今回の「ながさきピース文化祭 2025」をとおして、いつも以上に目的的に芸術文化に触れたり、平和について考えたりするなど多くのことを経験したり学んだりする機会が得られたのではないでしょうか。

例えば、平和を「自分ごと」として考え、原爆や戦争を「歴史の出来事」として学ぶだけではなく、自分の生活や未来に関わるテーマとして受け止める機会になった。ある人は、音楽や絵画鑑賞、舞台や演舞など様々な表現活動を観ることをとおして、命の大切さや人を大切にする心が言葉以上に伝わった。または、学校や地域など様々な場所で、様々な人と交流をすることができた・・など。

「ながさきピース文化祭２０２５」は、芸術や文化活動をとおして「被爆地としての長崎」というだけではなく、「長崎から平和を発信する」「共生社会の実現」というメッセージを伝えることができたイベントになったのではないでしょうか。